

天皇杯 JFA 第105回全日本サッカー選手権大会「夢は叶うプロジェクトとプレセンター」実施報告書

1. 概要

項目	詳細
イベント名	天皇杯 JFA 第105回全日本サッカー選手権大会 決勝
開催日時	2025年11月22日(金)
開催場所	国立競技場
活動実施団体	FUKUSHIMA WWW. READY SOCIAL株式会社(運営)
目的	大熊町からスタートした女子サッカーチームでも夢の国立競技場に立てること「想いをもって行動すれば夢は叶う！」ことを子供達に伝え、これから被災地域での生活ではあるが様々なチャレンジに果敢に挑戦してもらうきっかけづくり







2. 活動報告: 震災伝承と防災意識の啓発

FUKUSHIMA WWW.は、試合開始前および試合当日を通じて、以下の活動を実施しました。これは、単なるサッカーの試合に留まらず、東日本大震災からの復興と、未来に向けた防災・減災意識の向上を目的としたものです。

2-0. ピッチでの地域交流活動(ハイライト)

試合開始前には、大熊町・浪江町・双葉町の子供10人と親御さん合わせて17名が国立競技場のピッチに立ちました。特設ピッチにおいて、FUKUSHIMA WWW.の選手とヴィッセル神戸のキッズサポーターと一緒にサッカー交流を実施し、参加者全員が笑顔に包まれる感動的な瞬間を創出しました。この活動は、震災の被災地である双葉郡の子供たちに、夢の舞台での特別な体験を提供しました。

2-1. 対戦チームへの伝承活動と意識共有

実施内容	目的
震災の教訓・防災意識の伝達	決勝の舞台で対戦相手として訪れた他県のチームに対し、福島での震災の教訓や地域独自の防災意識の重要性を直接伝えました。
活動モデルの発信	サッカークラブが地域防災・減災に果たす役割を示す「サッカーによる地域活性化の一つのモデル」として、取り組みを紹介しました。
効果	他県チームを通じて、震災の教訓と防災意識の重要性が全国に拡散されるきっかけとなりました。



2-2. 観客へのピッチ上での発信

天皇杯決勝という最高の舞台において、大勢の観客に向けてFUKUSHIMA WWW.の活動内容とメッセージ

をピッチ上で発信しました。

- 発信内容: チームが日頃から取り組んでいる震災伝承活動、そして防災・減災への継続的な意識向上への貢献について、観客全体に訴えかけました。
- 意義: チームの活動が地域社会に与えるポジティブな影響を可視化し、来場者に対する防災意識の喚起に繋がりました。

2-3. 活動の評価と受賞

これらの継続的な地域貢献活動が社会的に高く評価され、天皇杯決勝の場で大賞を受賞しました。

受賞内容	評価のポイント
大賞受賞	スポーツの力とプラットフォームを活用した、継続的かつ具体的な防災・減災への取り組みが高く評価されました。

3. 公式セレモニーへの参加

天皇杯決勝の公式行事において、FUKUSHIMA WWW.のメンバーが重要な役割を担い、チームの存在感と地域貢献への強い意志を示しました。

3-1. 試合開始前のセレモニー

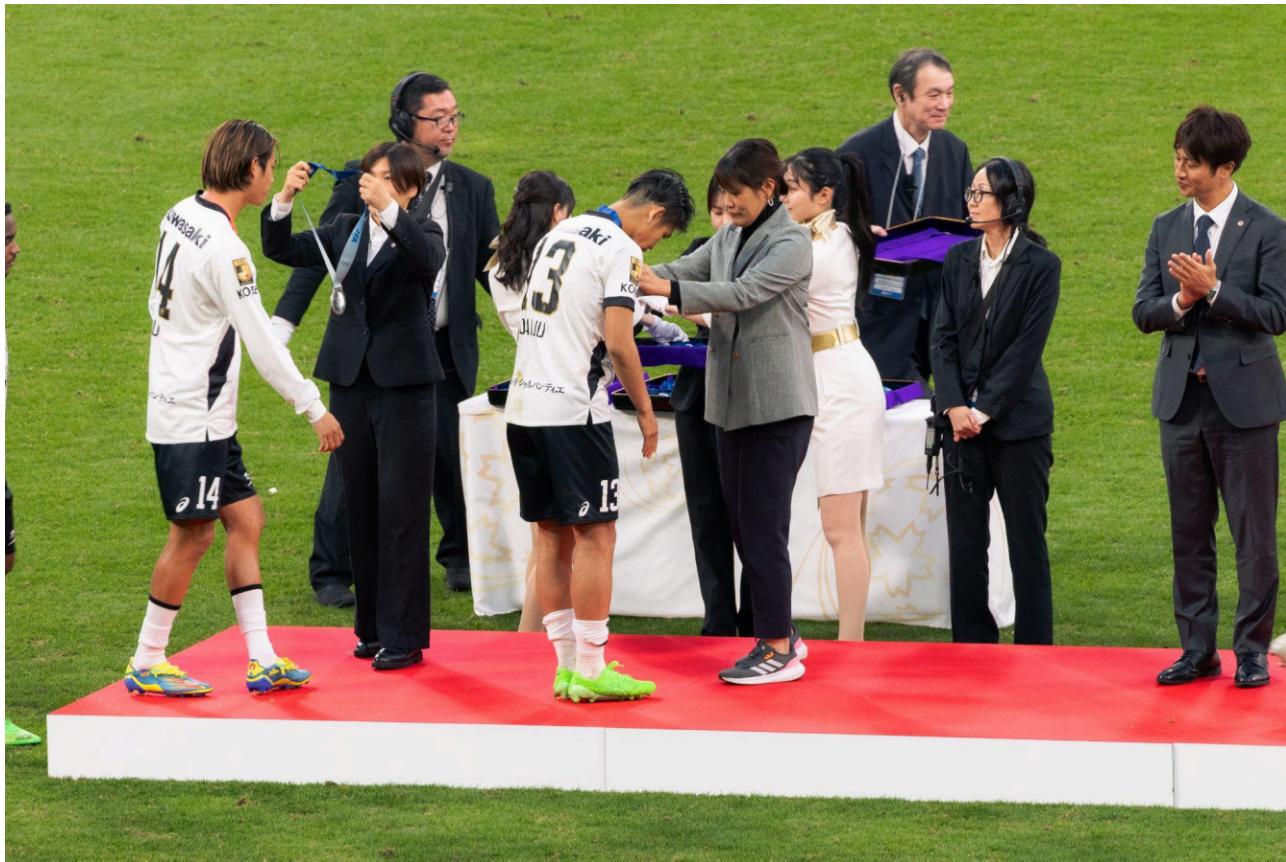
担当セレモニー	担当者	役割
ボール設置セレモニー	選手 中川 / 選手 一川	試合で使用する公式ボールをピッチに設置。
意義	試合開始という重要な瞬間にチームの代表者が立ち会い、活動のシンボルとなりました。	



@JFA

3-2. 試合後の表彰式

担当セレモニー	担当者	役割
メダル贈呈(プレゼンター)	代表 佐藤 / 選手 中川	優勝チームおよび準優勝チームの選手に対し、メダルを授与するプレゼンターを務めました。
意義	大会を締めくくる歴史的な瞬間に公式な立場で参加することで、FUKUSHIMA WWW.のスポーツ界における地位向上と、取り組みへの敬意が示されました。	



4. 参加者からのコメント

【清水親子：大熊町在住】

・国立競技場でしかも天皇杯の試合開始前に、ピッチに降りれるなんて大変貴重で子供ともども大興奮でした！このような機会をいただきありがとうございます。

普段はいわき市までサッカーをしに通っているがウィーアーの選手がゆめの森で練習しているのを平日見ていたので、この選手が国立競技場で大きなモニターに写ったり、有名な選手にメダルを渡したりしている姿を見て、感動した。

【山田親子：大熊町在住】

国立競技場のピッチという非日常的な場所で、天皇杯の熱い空気を味わうことができ、子どもに、とっても最高の思い出となりました。感謝申し上げます。

子供もサッカー選手になる！！と興奮していました。自分たちも頑張ればあそこに行けるかもしれない」という、具体的な夢の光景を見せていただき、深い感動を覚えました。